

『冬柏』…新詩社『明星』の未完の終焉

—その軌跡—

「新詩社の最終の機関誌である『冬柏』は創刊から終刊に到るまで、長年にわたってある意味で幻の雑誌であった。

その理由は幾つか挙げることができるが、最大の理由は第一次、第二次の『明星』のような一見藝術美術雑誌かと見まがう体裁の豪華版ではなく寛自身も言うように「簡素」な外見の体裁及び執筆者等の難点、また世間の知名度、評価の低さが根底にあった。昭和五年（一九三〇）の創刊時には寛も晶子もまだ生存しており、『冬柏』に傾けた兩人の情熱は『明星』時代と変わらず一貫していた。内容及び質に關しては新詩社の機関誌『明星』の前二者に勝るとも劣らないことを目標とし自負心もあった。実は、筆者は今までに『冬柏』について幾たびか論じ述べ発表もしてきたが、正直なところいつも気がかりなことを解決しないままに歳月と稿を重ねてきた。気がかりなことというのは『冬柏』の実態また刊行は全何冊なのか更に発行の期間が正確には何時から何時までであったのかということであった。『冬柏』の既刊の状態について詳細な情報が得られず最近まで未解決のまま年月が流れて、当時は閲覧可能な範囲の既刊分を対象の資料としてきたというのが現在までの実情である。

ところが二年ほど前にふとした偶然のきっかけで『冬柏』の復刻版が出版されることになり、また思いがけない所からはば完全な『冬柏』の原本が見出された。それによって全貌が俄に明らかになり欠号が四

冊ながら全一九一冊の『冬柏』完全版が陽の目を見ることになった。『冬柏』の研究に明るい展望を伴う未来が開けてきたのである。

約二年余りの間に配本が計七回にわたった復刻版が昨年一月に刊行が完結し配本も終了した。更に令和二年十二月五日から令和三年一月三十一日まで、大阪府堺市の「利晶の杜」で『冬柏』の企画展示会が開催され想定外の盛況で、所蔵者の特別の好意によって復刻版の原本『冬柏』一八七冊も展示されたのである。この劃期的な二つの行事は『冬柏』の知名度にかなり貢献したのではないだろうか。

○

今まで筆者は、『冬柏』に関しては寛、晶子また執筆者を個人的に取りあげて述べてきたのだが、本稿では復刻による『冬柏』が完全版として精査できるので、まず『冬柏』について改めて多少解説をしておくことにしたい。（未知の『冬柏』を周知するために）。

○第一次『明星』・第二次『明星』・『冬柏』

まず『冬柏』の本題に入る前に新詩社を歴史的に振り返ってその軌跡を簡単にたどっておくことにする。

東京新詩社の創立は明治三二年（一八九九）である。当時寛の妻は晶子ではなく、この翌年に『明星』第一次の創刊が始まるが前妻の林

西村 富美子

滝野が発行兼編輯者であった。その翌々年明治三十四年（一九〇二）に前妻との離婚、八月に晶子が第一歌集『みだれ髪』を刊行しこの年晶子と結婚した。この時から寛、晶子の二人三脚の長い旅が始まるのである。以後の『明星』から『冬柏』への歴史を記しておく、

(年齢) 寛 晶子

新詩社創立

『明星』第一次創刊	明治三三年1899	一月	二六	二二
『明星』一〇〇号終刊	明治三三年1900	四月	二七	二三
『明星』第二次復刊	明治四一年1908	一月	約八年	三五 三〇
『明星』四八号終刊	大正一〇年1921	一月	四八	四三
『冬柏』創刊	昭和二年1927	九月	約六年	五四 四九
『冬柏』一九一号終刊	昭和五年1930	三月	五七	五二
	昭和七年1932	三月	約二年	
	昭和一〇年1935	三月	寛死去	六二 五七
	昭和一二一年1937		日中戦争勃発	五九
	昭和一五年1940		五月晶子脳溢血	六二
	昭和一六年1941		一月太平洋戦争勃発	六三
	昭和一七年1942		五月晶子死去	六四

新詩社創立（一八九九）の翌年に『明星』第一次が創刊され（一九〇〇）、約八年の後に一〇〇号をもって終刊となる（一九〇八）。その一三年後に『明星』第二次が復刊するが（一九二一）、約六年後に四八号をもって終刊となる（一九二七）。『冬柏』の創刊はその三年後であり（一九三〇）、刊行年月約二二年間の一九一七号をもって新詩社の機関雑誌は事実上終刊を告げた（一九五二）。明治三三年（一九〇〇）から昭和二七年（一九五二）まで五二年の間に途中様々の紆余曲折を経ながら実質的に三六年間にわたって、『明星』一次・二次、『冬柏』の三点の新詩社の機関雑誌を刊行し続けた歴史的意義は極めて大きいと言えよう。特に『冬柏』刊行中は日中戦争、太平洋戦争等の社会情勢の緊迫の時期であり、新詩社の中心である寛、晶子の両主宰者を失

『冬柏』…新詩社『明星』の未完の終焉

うなどの最大の打撃に見舞われたが、太平洋戦争敗戦、また晶子の死後も同人達の懸命な協力によって十年間刊行を続けたのである。

次に各誌の発行冊数、年数、さらに執筆者数を提示しておく、

発行冊数 発行年数 執筆者数（概数）

・明星第一次	一〇〇冊	八年	七三一
・明星第二次	四八冊	六年	三二二
・冬柏	一九一冊	二二年	九四一

であり、『冬柏』の執筆者数は突出している。概数ではなく正確な人数は優に千人を超えるであろう。また『明星』から『冬柏』に到る執筆者の男女数に大きな変化が見られ『冬柏』では男女の執筆者数がほぼ同数になっている。

次に『明星』→『冬柏』の主な執筆者を挙げれば、

◎『明星』第一次

上田敏・馬場孤蝶・薄田泣菫・高村光太郎・三樹一平・小林政治・金田一京助・鳳晶子・山川登美子・茅野雅子・高浜虚子・久保天随・小栗風葉・蒲原有明・相馬御風・平野万里・茅野蕭々・松永周二・石川啄木・国木田独步・石井柏亭・江南文三・三宅克巳・渡辺湖畔・白仁秋津・吉井勇・北原白秋・木下李太郎・長田秀雄・長田幹彦・岡本かのこ・高田保馬・尾崎行雄（号堂）・吉田精一（明治三四年（一九〇二）ごろには同人の数は二〇〇人を超す）

◎『明星』第二次

石井柏亭・尾崎号堂・北原白秋・木下李太郎・佐藤春夫・高田保馬・高村光太郎・竹友藻風・茅野蕭蕭・永井荷風・西村伊作・平野万里・深尾須磨子・堀口大学・森鷗外・吉田精一・掛貝芳男・田中千々崎（悌六）

◎『冬柏』[第一巻・第一号の主な執筆者]与謝野晶子・与謝野寛・赤

木毅・内山英保・江南文三・近江満子・尾崎号堂・掛貝芳男・木下李太郎・小金井喜美子・斎藤紀子・白仁秋津・菅沼宗四郎・関戸信

『冬柏』・新詩社『明星』の未完の終焉

次・高田保馬・田中悌六(千ヶ崎)・茅野蕭蕭・新居格・西田猪之助・平野万里・福田克子・茂手木みさを・吉田精一・井上苔溪

この三誌の執筆者をみれば、三誌に共通の執筆者もあり、『冬柏』に関しては、第一巻・一号の執筆者に限定したため前二誌とは多少状況を異にするかも知れない。ただ『冬柏』は執筆者の数は他の二誌よりかなり多いのだが、その顔ぶれは前二誌に比べ各分野での社会的な著名人が少なくなっている。執筆者の量と質とでもいふべき問題が浮上するが主宰者の意図の変化も底辺に存在したように思う。歌作に対する晶子の指向転換とでも呼ぶべきであろうか。

○『冬柏』創刊の理由

『冬柏』創刊のきっかけとなったのは、徳富蘇峰の言葉であった。それは『冬柏』第一巻・一号に平野万里が記した「刊行の辞」に見える。『冬柏』創刊時の事情も詳細に述べているので次に全文を挙げておく。

昨冬冬至の夕、夫人の与謝野晶子五十の賀筵が東京会館で催された時、席上徳富猪一郎先生の御挨拶があった。それは極めて興味深いものであったが、終わりに先生は明星の休刊を遺憾とせられ、著者と読者の間を永年結びつけて居た親しむべき絆をこの際何とかして繋ぐよう切に御奨めがあった。先之新詩社の若い人々の間にも発表機関の必用が感ぜられていたので、於是相談一決して爾来準備を急ぎここに本誌の刊行を見るに至った。冬柏という名を与えたのもその縁によるのである。

明星の再興はもっと望ましいことだが、与謝野家の負担を甚だ重からしめる虞があつて俄に出来にくい。冬柏はそこへ行く道程として一時之に代わるものである。同人の僅少な拠金を本として出すものであるからその体裁の如きも極めて貧しく明星に比し同日の談ではないが、無きには勝るであろう。とは言へ内容は殆ど全

部同様與謝野先生の手で整えられるものであるから、その点は明星に変わりはない積もりである。唯当分同人の一人として事務に当たる小生の趣味が田舎びて好んで時代の後端を行く処から、御不満の方も多からうと思うが、暫く御辛棒が願いたい。その代わり永続性はあるかと思う。幸にして本誌が漸次生長し、經濟上に独立し得る域に達したら即時明星の名に復すると共に体裁も一変するのである。それ迄待つて頂きたい。(万里)

『冬柏』の発刊及び雑誌の名を『冬柏』としたこと、目標は『明星』の復刊であることをはっきりと宣言したのである。

次に『冬柏』の体裁、形態、内容他について記しておくことにする。

○雑誌『冬柏』の形態・内容・他

先に述べたように、『冬柏』は『明星』に比べてはるかに長く刊行の続いた雑誌である。『明星』第一次は約八年、第二次は約六年、併せて約一四年、『冬柏』は約二年間である。刊行の冊数は、第一次が百冊、第二次が四八冊、併せて一四八冊であり、『冬柏』は一九一冊で、刊行年数及び既刊の冊数は前二者の『明星』をはるかに凌いでいる。また『明星』は寛、晶子の両人の主宰者が生存中に刊行された名実ともに『明星』文学集団の雑誌であったが、『冬柏』の主宰者には大きな変動があった。創刊五年後の昭和十年(一九三五)に寛、更に七年後の昭和十七年(一九四二)に晶子、と新詩社『明星』の主宰者両人が亡くなり、中心の領袖を失って後門弟子の協力体制で十年間刊行を継続した稀有な雑誌であった。二十二年の間には雑誌自体にも様々な変化があった。その変化の諸相には戦争など時代の影響もあるが新詩社内部での人間関係も関わっていたようである。寛、晶子歿後の十年は特に太平洋戦争の戦中戦後の時期でもあり雑誌自体の発行も困難な状況であった。こうした劣悪で特殊な条件のもとで刊行された

『冬柏』自体の変化の軌跡について次に述べておくことにしたい。雑誌の発行には、編輯者また印刷にかかわる発行所等は必要不可欠な条件であり、『冬柏』に關してもこれらの条件を充たすのかなりの苦勞があったようである。

そこで、編輯者・発行者・印刷者・発行所・発売所等について順次列挙して記述しておくことにする。

*編輯者

一 平野久保(万里) 約一年

第一卷・一号〜第二卷・七号(昭和五年三月〜昭和六年七月)

二 田中悌六 約一〇年

第二卷・八号〜第三・九号(昭和六年八月〜昭和一七年八月)

※(昭和一〇年三月、寛の死)

※(昭和一七年五月、晶子の死)

三 近江満子 約一〇年

第三卷・一〇号〜第三卷・六・七・八月号(昭和一七年九月〜昭和二六年八月)

※(昭和二六年一〇月一〇日、近江満子の死)

四 近江湖雄三

第三卷春季・追悼号(昭和二七年三月)

編輯者は、平野万里―田中悌六―近江満子―近江湖雄三の四人が担当を受け継いでいった。発起人の一人であった平野万里は一年、田中悌六・近江満子の両者は一〇年ほどだが、田中悌六が編輯を担当した時期に寛、晶子が死去し、近江満子が担当したのが戦中戦後で、編輯の仕事の困難さは時代を追うにつれて厳しさを増していった。編輯者は雑誌の発行にとって重要なのだが編輯者の交代あるいは引き継ぎについては不明な点がある。田中悌六と近江満子の二人は、寛、晶子の信任も篤く『冬柏』にとって特別に重要な存在であった。

*発行者

一 掛貝芳男 第一卷・一号〜第二卷・七号
二 田中悌六 第二卷・八号以降、発行者・編集者は田中悌六
三 近江満子 第三卷・一〇号〜第三卷・六・七・八号
発行者は、掛貝芳男―田中悌六―近江満子の三人が順次名を連ねているが、第二卷・八号からは田中悌六が編輯・発行者を兼ね、第三卷・一〇号から第三卷・六・七・八号までは近江満子が編輯・発行者を兼ねている。

*印刷者

一 明章印刷所・鈴木起武 第一卷・一号〜第一六卷・二号
二 塚田十五郎 第一七卷・一号

三 吉田信賢 第一七卷・秋季号〜第二二卷・一・二号

四 山本一郎 第二二卷・秋季号〜第三卷春季・追悼号

印刷所は、明章印刷所―塚田十郎―吉田信賢―山本一郎の各印刷所によったが、明章印刷所(鈴木起武)との関係が最も深く長い。

*発行所

一 冬柏発行所 第一卷・一号〜第一六卷・二号

二 塚田印刷所 第一七卷・一号

三 一色活版印刷所 第一七卷・秋季号〜第二二卷・第一・二号

四 山本印刷所 第二二卷・秋季号・第三卷・春季・追悼号

発行所は前記の印刷者とはほぼ同じである。

*発売所

益文堂 第二卷・七号〜第二二卷・六号

発売所については一時期のみなのだが、元々店頭販売をしない非売品であったのでこの期間だけは何か事情があったのかも知れない。

以上編輯者・発行者・印刷者・発行所・発売所を記したが、編輯者は寄稿原稿の校閲・校正者でもあり印刷関係者とも親密な関係であった。

次に『冬柏』の雑誌名の「つばき」の表紙画について述べる。

『冬柏』…新詩社『明星』の未完の終焉

○『冬柏』の表紙画・裏表紙・表題字

*表紙画(つばきの花)

- 一 広川松五郎 第一巻・一号〜第一一巻・一一号 一二五冊
- 二 石井柏亭 第二巻・一号〜第一五巻・一一号 四七冊
- 三 表紙画無し 第一六巻・一号〜第一九巻春季・夏季号 九冊
- 四 近江湖雄三(天〇) 第一九巻・秋季号、冬季号、第二〇巻・春季号、秋季号、冬季号 五冊

五 正宗得三郎 第二一巻・秋季号〜第二三巻・春季追悼号 六冊

表紙画は、広川松五郎―石井柏亭―正宗得三郎―近江湖雄三の四人によって描かれている。デザイン、彩色等は趣向を凝らしてはいるが自然なタッチで親近感のある図柄である。広川松五郎、石井柏亭、正宗得三郎の三人は著名な画家であり、近江湖雄三(近江湖子の夫)だけは専門画家ではなく臨時の応急的存在である。ただ号を追うにつれて時勢の影響もあり表紙画は次第に簡素になっていった。中には表紙画無しの号もあり近江湖子の夫湖雄三が次の正宗得三郎の表紙画復活まで臨時に表紙画を描いたのである。本業は医師であり寛、晶子とも親密で絵を描くのを好んだという。署名は天〇。

裏表紙画・挿入画については、画家・及び作品の数が膨大であるため本稿では省略することにした。例えば田中悌六なども二五点ほど画を掲載している。次に表紙の『冬柏』の文字、表題の字の書き手について挙げておく。

*表題字(冬柏)

- 一 松永周二 第一巻・一号〜第六巻・一一号

- 二 山城正忠 第七巻・一号〜第二三巻・春季・追悼号。

表題の『冬柏』の文字は、松永周二―山城正忠の二人の書家が揮毫しているが山城正忠が大半を占め前者は楷書風、後者は行書風の書体である。

○『冬柏』の刊行状況

既に述べたように発行総冊数は一九一冊、創刊は昭和五年(一九三〇)三月、終刊は昭和二七(一九五二)年三月、発行年数は三二年間である。一九一冊には昭和二年(一九三七)四月刊行の『別刊冬柏』(二〇頁)を含む。

昭和五年(一九三〇)三月の創刊から三二年間にわたって刊行し続けたが新詩社『明星』の継承誌との当事者たちの強い意識にもかかわらず総冊数一九一冊の刊行の経過は全く順調とはいえないものであった。社会情勢の激動というに等しい変化の影響を受けての本誌の発行には予想外の困難を伴ったことが特に後半の『冬柏』から見とれる。従って創刊号を出した当初は、第一巻から第一五巻(昭和五年三月〜昭和一九年一〇月)までは何とか月刊を保ってきたが、第一六巻から最終の第二三巻(昭和二〇年二月〜昭和二七年三月)の刊行状況は次の通りであり、年に一冊の時期さえある。

第一六巻―二冊 第十七巻―二冊 第十八巻―一冊

第十九巻―四冊 第二〇巻〜第二三巻―三冊 第二三巻―一冊

また発行冊数の減少とともに、各号の掲載頁数も次第に減少し、当初から一〇〇頁程度を維持してきたのだが、第一四巻(昭和一八年)以降は一冊が五〇〜六〇頁、第一五巻(昭和一九年)以降は激減し一冊が三〇頁程度になっていた。

ただこうした減少傾向の中で特別なのが第二二巻の一・二月号の合併号、一三〇頁である。昭和二五年(一九五〇)二月発行、戦後数年を経た時期であるが表題の字の上に「與謝野寛・晶子創刊 二十年記念特輯」とあり、表紙は緋色一色で表紙画は無く表題が「晶子と近代抒情」とある。近江湖子が「巻頭に」と題し次のような文を載せている。

前略……………

明治中葉に開花した新詩社も五十年といふ月日の推移が、与謝野両先生の御存在をすら、既に古典の中に入れようとする昭和の今

日となりました。「冬柏」は故先生直門の同人ならびに同列の諸先輩に乞ひ、一言にても先生の生きた御言葉を残して置いて頂きたく特輯の挙に出ました。……………略

と、この特輯号を出す目的と意義を述べている。この特集号は池田龜鑑が編輯に関わっている。文章の執筆者は豪華な顔ぶれである。

* 先ず次に挙げた人たちがそれぞれ一文を載せている。

近江満子・吉井勇・新村出・釈超空・高浜虚子・深尾須磨子・安田章生・中川与一・北見志保子・真下喜太郎・森脇一夫・新居格・吉田精一・湯浅光雄・信楽香雲・津田青楓・島谷牧翁・新聞進一・石井柏亭・掛貝芳男・五島美代子・岩野喜久代・有島生馬・西村一平・三宅克巳・西村伊作・小林天眠・池田龜鑑

(中で高浜虚子などは「ひな壇」と題して、「真下喜太郎新婚間もなく雛壇の下に、与謝野夫妻と同席したること。追憶はくさぐさのこと雛のこと」の俳句一句を寄せている。真下喜太郎は高浜虚子の娘婿。)

* 「与謝野寛・晶子研究資料」と題して「書翰集」

* 「与謝野晶子年譜」

* 「新詩社同人の作品」と題して六十人の短歌(各人四首)

* 「人間風月」と題して二十人の短歌(各人二首)

の構成で編輯して、『冬柏』創刊二十年の総括をした号であり、『冬柏』随一の貴重な資料として存在価値がある。

だが、発行冊数と掲載頁数の減少は同じ傾向をたどり、第一七巻一・二号(昭和二年二月発行)は合併号にもかかわらず最少の一八頁である。太平洋戦争敗戦の翌年であるが終刊に到るまでこの傾向をひきずりながら刊行を続けた。更に後に触れるがこの頁数は各号の末尾に掲載する付録の記事(消息等)を含んでおり、寄稿者たちの作品を掲載する本紙の頁数は実質的には更に減少している。

『冬柏』各号の末尾には「消息欄」を設けて寛、晶子や同人たちの

『冬柏』…新詩社『明星』の未完の終焉

動向情報載せる体裁は最終号まで不変であったが、寄稿者の歌稿を掲載するに当たっての項目は巻を追うにつれて次第に増加し新しい項目名がつけられてそれは寄稿者の類別を意味したようである。

短歌の部は「新詩社詠草」・「冬柏抄」・「宝玉の篋(新詩社詠草)」・「星雲の舞(冬柏詠草)」・「人間風月(新詩社詠草)」等が項目に加えられていき、各号の短歌掲載の後に、「消息」欄だけが置かれていたのだが、「書翰一束」・「萬里宛尺牘一束」・「冬柏だより」・「編輯後記」の項目が追加されている。この「消息」以降の欄は同人達の動向情報を記しており同人達、同人の家族親戚に関する情報は『冬柏』の最大の特徴と言ってよいのではないだろうか。筆者は『冬柏』を読むうちに、歌稿の掲載部分よりこの「消息」欄に続く「書翰一束」等の内容を調査の対象とするように方向転換をし現在続行中である。歌以外の個人の作品が載せられていることがある。

次に寄稿者について述べておく。

○『冬柏』の同人・寄稿者

『冬柏』の寄稿者で寄稿の数の非常に多いのは、近江満子、掛貝芳男、田中悌六、小金井喜美子、白仁秋津、菅沼宗四郎、田中悌六、西村一平等である。

『明星』に比して著名人は少ないが先に挙げた寄稿者を分別すれば、政治家の尾崎弐堂を初めとして、歌人の吉井勇、佐々木信綱、釈超空、五島美代子、安田章生。俳人の高浜虚子。詩人の上田敏、高村光太郎、堀口大学、深尾須磨子、蒲原有明。作家の佐藤春夫、長谷川伸、正宗敦夫、森鷗外、森潤三郎、中河与一。医者・詩人・劇作家の木下幸太郎。画家の山下真太郎、三宅克巳、広川松五郎、田中悌六、正宗得三郎、津田青楓、梅原龍三郎、中河紀元、中沢弘光、有島生馬。国分学者の吉田精一、久松潜一、池田龜鑑、塩田良平、新聞進一。英文学者の竹友藻風。独文学者・歌人・詩人の茅野蕭蕭。中国文学者の奥野信

『冬柏』…新詩社『明星』の未完の終焉

太郎。経済学者の高田保馬。評論家の保田與十郎等が名を連ねている。ただし『冬柏』に収録されている歌稿はすべて新詩社の同人の作ではない。掲載するに当たって類別が行われており、同人でなく維持会員もいたようで、一般からの投稿を歓迎することがあったようである。校閲料を払えばよく、「好い作は雑誌に載せる」との晶子の言もある。女性たちに対し曜日を決めて短歌の作歌指導を行ってみたい。一種の啓蒙運動、短歌の普及運動を試みるようになっていた。

次に『冬柏』を発刊するようになった事情また計画等について、寛、晶子の当時の心情を知ることのできる文がある。

○『冬柏』刊行の事情

『冬柏』を発刊することになった事情、また実際の雑誌発行のための事務的な業務等について寛、晶子は次のように語っている。

○新詩社の同人が平野万里君を推して雑誌『冬柏』の編輯及び発行の主任に当たって貰ひ、東京及び各地の同人が平野君に対して出来るだけの協力と助成とを負担すると云ふ組織の下に、この『冬柏』が発行されることになった。煩雑な公務に従事してゐられる平野君に、三十年前の学生時代ならともかく、今日に及んで雑誌の雑務までを見て頂くと云ふのは甚だ濟まない事なのであるが、君が辞退せず快く引き受けられたのは、君に取ては貧乏くじを引かれたもの、我我同人全部に取ては、勿体ないほどのすべてに立派な編輯代表者を得たものである。此事は社外の師友も、社中の同人も、ひとしく喜んで下さる事であらう。

我我の間に雑誌を持つことは、特に親しい先輩と諸友との思想上の近状を知るために緊要である。雑誌は世間に多いが、その目的が営利である以上、商品として書かず、商品たるに適せざる我我の述作を載せてくれる筈が無い、自由に各自の筆に成ったものを載せようとするには、どうしても我我の雑誌を持ってゐるならばなら

ない。お互の間に雑誌があつて、新しい述作を毎月発表し合ふと、それが直ちにお互の精神上の交通になり、他の内部生活を読むことの悦びを感じると共に、自己の刺激として励まされる所も併せて多い。人間は一面に怠け者にならうとし、安易に甘んずる性情もあるから、雑誌でも無いと、刺激し合ふ機会が無く、それをよい事にして、うかうかと創作力を鈍らせもする。雑誌を持った経験のある我我に取って、昭和二年五月このかた雑誌を失つてゐた事は、非常に寂しい思ひを忍んで来た事であり、以前から我我の雑誌を助成して下さった師友に対して、まことに申訳の無い失態を重ねてゐる事として、人知れず心を苦めるのであつた。茲に『冬柏』が唯一の自由機関誌として我我の間に生れ出でたのは、誰よりも先づ我我夫婦の喜びで有り、諸友に対して感謝申上げるところである。

○『冬柏』は決して軽卒に計画されなかつた。発行費の収支について十二分に考慮せられた。紙数の少ないのを初め遺憾な点のあるのは、手堅い出发点から漸次に順当な発達を計りたいためである。同人はお互に此点を考へて我慢したい。社外の先輩諸友も暫く寛恕を賜りたい。唯だ我我が良心的に甚しく自ら痛むこと無くして『冬柏』のために述べ得ることは、この形式の簡素は止むを得ないとして、この内容には力めて無用の文字、無誠実の文字、無創意的の文字を排除して揚げない事である。この意味に於て『冬柏』の発行は社中同人を自重と発奮とに導くべく、号を逐うて掲ぐる所が諸君の新声であることを期待する。

○『明星』の読者であつた諸君に、今月から『冬柏』を差出します。同時に托せられてゐた『明星』の前金を『冬柏』の前金に振替へました。此事を御諒承下され、『明星』同様に御愛読くださることを願ひます。

○新詩社短歌会の詠草で、久しくお返しを怠つてゐたものは、漸

次に其中から撰抜して「冬柏」へ載せた上でお返し致します。
「冬柏」の編輯や雑務を平野さんに負担して頂くやうになったので、我々は其代りに諸友の詠草を取捨する事に従来よりも多く努力する積りで。
(以上、寛。晶子)

……………(中略)……………

○この数年文筆から全然遠ざかって鶏飼ひに没頭してゐた小生が俄に「冬柏」の編輯をやることになりました。自分に取って之程意外のことはありません。それ故何の用意も無かつたのです。先輩旧知に寄稿を乞ふ余裕さへなく、大体休刊前の明星の原稿を骨子とし忽卒の間に作りあげたのが本号です。従って体裁その他不手際だらけのことと思はれます。筆者諸兄姉の寛恕を願ふ次第です。しかし慣れるに従ひ号を追って少しは改善されて行くことと思ひます。……………(中略)……………

○本誌は僅少の基金を以てする非営利的の単なる発表機関です。一切の無駄を省く主義であくまで内容本位で進みたいと思ひます。今の処体裁などに構つてゐる余裕がありません。この点旧明星の愛読者の御不満を買ふかも知れません。併し何時までもこれでやり通さうといふのではなく、一定数の読者が出来収支相償ふ日が来たら直に與謝野先生の手にお返して明星として更生するのですから暫く御辛棒を願ひます。(万里生)

と寛、晶子の計画、決意また「冬柏」の理想とするところを語る。平野万里が、編輯、発行の主任で、編輯代表者。東京及び各地の同人が協力、助成をする。「冬柏」は商品ではなく非売品であること。唯一の自由機関誌。発行費の収支を考慮。紙数は少なく形式は簡素、無用の文字、無誠実の文字、無創意の文字、の排除。「明星」の前金を「冬柏」前金とする。また平野万里が、「冬柏」の編輯を引き受けること、この第一巻一号は休刊前の明星の原稿を骨子とし、非営利的発表機関であり、内容本位である。収支相償う日には明星として更生し復

『冬柏』…新詩社『明星』の未完の終焉

刊する、のだという思いを語っている。

次に『冬柏』所蔵の状況について少し触れておく。

○『冬柏』の諸本の所蔵状況

『明星』に比して『冬柏』を所蔵する所は極めて少ない。殆どが元本は未だに出現していない。その原因は初めに述べたように、やはり『冬柏』自体の評価に基因するだろう。極言すれば保存に値する価値を認められていなかったということである。従って二〇二〇年の復刻版刊行の完結はやはり新詩社『明星』にとって大きな足跡を一步記したと言える。一九一冊のうち四冊を欠くものではあるが、筆者の察するところ一冊も欠号無しに『冬柏』の完本は将来も出現しないように思う。この一八七冊+四冊の一九一冊の『冬柏』復刻本は極めて貴重な重要な存在である。与謝野寛、晶子両人を主宰者とする新詩社『明星』がどのような諸相を展開しつつ未來への軌跡を残したのか、詳細にたどることのできる手がかりがやっと実現したと言えるのではないだろうか。新詩社『明星』の誕生から、終焉に到る一つの明るい道筋が示されたと言つても過言ではないだろう。その意味において、『冬柏』の存在は、未完の終焉と言うにふさわしいのではないかと、筆者は考えている。

『冬柏』の各所の所蔵状況については整理総括した後稿を改めたい。

○『冬柏』と漢詩

筆者が新詩社の『明星』一次・二次、『冬柏』を追い続けてきたのはこれらの雑誌に収録された漢詩の調査であった。主宰者の寛、また同人達の作品を収集し整理したうえで評価をすることであった。漢詩と無縁に見える新詩社の雑誌『明星』『冬柏』に漢詩を掲載すること

『冬柏』…新詩社『明星』の未完の終焉

自体予想外のことと思われるのが普通であり、短歌と漢詩は《かな》と《漢字》と文字も違えば形式は更に異なり、短歌愛好者が漢詩愛好者であることは極めて少ない、というのが現代の常識である。だが『明星』『冬柏』の時代は様相を異にし短歌も作れば漢詩も作るという才能の持ち主が少なからずいたのである。これには主宰者・与謝野寛の影響が否定できないであろう。筆者の『冬柏』に関する調査はまだ道半ばであるが、寛以外の同人の漢詩を幾つか収集したので今回の最後の章に記しておくことにした。

先ずかつて井上蒼溪に中国の詩の詩訳を試みた作品がある。同じ形式の訳詩が他にもあり、訳詩者は真下喜太郎で、(一)は「譯詩三篇」と題する三首の樂府詩三首。(二)は「押韻譯詩」と題する五言絶句三首の訳詩である。(三)の「譯詩三篇」、(四)の「押韻譯詩五言絶句三首」は、ともに明代の高邱(高青邱)の詩である。次にその詩を挙げておく。

(一) 譯詩三篇(高青邱)

第七卷・一号

一 牧牛

角曲れるはなれが牛
尾の短きはわれの牛
笛と鞭とに牛追へば
岡の間を牛通ふ
牛の歩みに野は暮れて
牛の疲れてなやめるも
牛の飢うるも知るはわれ
歌ふも居るも牛とも
牛のかたへに丸寝して
牛を飼ふこと長けれど
牛飼ふことになげきなし
牛の主が租税にと

牛を出して賣るまでは。

二 鏡

君が持つたる青銅の鏡は
鏡は價がたふとうて黄金に
まざるものよ喃さはさりながらこれとても
ただ面影を見るばかり
心の丈けは見えぬようなう。

三 洞房

合飲木花置くこの間は
暮るれば會ふといふ心
手摺の外は月が落ち
月におどろく親鴉
歸るとするを留めるとて
深くすすめし酒の酔
あの郭よりこの家が
とまり心はよい筈と
いふはあはれな圍ひもの。

※高邱の原詩。

(一) 譯詩三篇

一 牧牛詞 (樂府詩)

爾牛角彎環、我牛尾秃速。
共拈短笛與長鞭、南隴東岡去相逐。
日斜草遠牛行遲、牛勞牛飢惟我知。
牛上唱歌牛下坐、夜歸還向牛邊臥。
長年牧牛百不憂、但恐輪租賣我牛。

二 照鏡詞 (樂府詩)

君家青銅鏡、價重比黃金。空持照人面、不持照人心。

三 洞房曲 (楽府詩)

洞房香吐合昏花、月轉勾欄啼乳鴉。今宵有酒留君醉、不信娼家勝妾家。

(二) 押韻譯詩 (高青邱)

第七卷・二號

― 青邱の詩をたづさへて冬ごもる人を忘れておそき春かな ―
析

城のあしたの拍子木は
霜つめたしと聞ゆなれ。
關の夕に撃つときは
月上るとてひびくなれ。

ひとよつづけて鳴る音の
あらぬ方こそ戀しけれ。
夢破らるる苦しきの
しばしばなるを思ひ知れ。

飄

大ふくべ

朝露に まろびたる

とりもてぞ 歸りける。

笑ひけり、うた人に かくのごと

肥えし骨 なからんと。

おちぶれ役者 (優人李州僑、米を乞ふ)

おしろいつけて眉つくり
人のうたげにはべりつつ
なれも昔は富みしよの。
はかなく過ぎしその盛り

『冬栢』…新詩社『明星』の未完の終焉

なりもかたちもおとろへつ。

今はかたるとおなじよの。

みだれたる世の人ごころ

芝居のつづみ笛にさへ

耳かすものあらぬよの。

なげくことかは、つねひごろ

君に召さるる役者さへ

飢ゑと寒さになくものをなう。

一 聞析

(五言絶句)

※高邱の原詩

朝撃城上霜、暮撃關下月。愁夢畏頻驚、何方此聲歇。

二 摘瓢

(五言絶句)

輪困臥霜露、秋曉摘初歸。自笑詩人骨、何由似爾肥。

三 優人李州僑乞米二首 一 (五言絶句)

曾稱富貴客、粉墨尊前面。憔悴立窮途、渾非舊時見。

○高啓 (一三三六―一三七四) 明代の詩人。字は季迪、号は青邱

子。蘇州の生まれ。青邱は吳淞江沿岸の地名で妻の出身地。友人魏

観の罪に連坐して死刑に処せられた。三九歳。

○真下喜太郎。俳人、歌人。慶応大学理財科卒業。大正六年 (一九

一七)、高浜虚子の長女真砂子と結婚、「ホトトギス」に投稿。短歌

を与謝野鉄幹・晶子に学ぶ。

○寛以外の漢詩

次に、寛以外で自作の漢詩を載せる六人の同人たちの作品を挙げて
おく。

(一) 小池曼洞 (二) 島谷亮輔 (三) 高木藤太郎

(四) 栢邨 (市丸利之助) (五) 田中松太郎 (六) 高木輝堂

『冬柏』…新詩社「明星」の未完の終焉

(一)(二)は本紙に掲載。(三)、(四)は消息欄。(五)は付録の項目「万里宛尺牘一束」に掲載。(六)は埋草。

(一) 小池曼洞

第三卷・八号

悼與謝野晶子女史

七言絶句五首

与謝野晶子女史を悼む 五首

夙仰明星照藝林 夙に明星の芸林を照らすを仰ぎ
又看冬柏散清陰 又た冬柏の清陰に散るを見る
幽魂一去無窮恨 幽魂一たび去って 無窮の恨み
天上人間千古心 天上人間 千古の心

天賦歌才逸世姿

天賦の歌才 逸世の姿

清新鍊句有誰疑

清新の鍊句 誰か疑い有らん

詠懷詠物多奇構

詠懷 詠物 奇構多く

咳唾分明絶妙辭

咳唾分明なり 絶妙の辞

才名藉甚更無倫

才名 藉甚だしく 更に倫無し

自是歌壇第一人

自らは歌壇の第一人

五十年間天地事

五十年間 天地の事

傾將識見寫其真

將に識見を傾けて 其の真を写す

曾游德佛感人深

曾て德・仏に遊びて 人の深きを感じ

究得歐洲文化心

歐洲の文化の心を究め得たり

吾亦同年異鄉客

吾も亦た同年に異郷の客

半生不負舊知音

半生 旧知の音に負かず

曾催雅會道相親

曾て雅會を催し 相親しむを道う

同席佳賓亦出塵

同席の佳賓 亦た出塵

髣髴音容猶在眼

髣髴たり 音容猶お眼に在るがごとし

幽閑貞靜果何人 幽閑貞靜 果たして何人ならん

昭和十七年夏七月九日

曼洞 小池重 賦此

※晶子の死に対する哀悼の詩である。

(消息) 今年の九月会は、与謝野先生の長逝の爲め、その追憶の意味を含めて催す事となつた。去る九日夜麴町区富士見町の大松閣にお集りを願つた方は、与謝野光、秀氏、同夫人をはじめ七十四名で盛会であつた。宴会に先立つて曼洞小池博士の漢詩の朗読井上苔蹊氏に依頼し、続いて間島磐雄氏の短歌の朗詠があり六時開宴。

*小池曼洞。曼洞は号。医学博士。東大医学部卒。寛と交友関係。

(二) 島谷亮輔

第一九卷・夏季号

詠懷 詠懷

牧翁

(五言古詩)

嗣子昌雄屬轡部隊、歿于比島戰線享年廿五

嗣子昌雄轡部隊に属し、比島戰線にて歿す。享年廿五

八月十五日

八月十五日

神洲落汗塵

神洲 汗塵落つ

七千有餘萬

七千有余万

大息淚沾巾

大息し 涙 巾を沾おす

人事渾是夢

人事は渾て是れ夢

時勢變移頻

時勢 變移すること頻りなり

嗣子征不返

嗣子 征きて返らず

老翁耕畦盼

老翁 畦盼を耕す

依何慰寂寞

何に依つてか寂寞を慰めん

唯與書卷親

唯だ書卷と親しむのみ

願更得醇酒

願わくは醇酒を得て

享神以藻蘋

神を享るに藻蘋を以てせん

(書翰一束) 牧翁の漢詩「嗣子征不返、老翁耕畦盼」悲愴、牧翁大人

のやる瀬ない真情に思ひ到り、気が重くなる。自ら慰めるため、これから毎号とて戴きたい。八月七日(菅沼記) 第一九卷・秋季号
*島谷亮輔(牧翁)。牧翁は号。抛書山莊主人。夫妻で寛、晶子と親密な関係。

(三) 高木藤太郎 第一三卷・一号
尚、高木藤太郎氏から左の詩一篇を頂戴しました。

新詩社歌會席上自嘲作 高木輝堂 (七言絶句)

新詩社の歌會の席上にて自ら嘲りて作る

偏喜清談屬好期 偏に清談 好期に属するを喜び

一庭秋色欲奇時 一庭 秋色 奇ならんと欲する時

慚吾老懶歌難就 吾れ老懶にして 歌就り難きを慚じ

辛綴半篇迂拙詩 辛うじて半篇迂拙の詩を綴る

*高木藤太郎。野口米次郎(英詩人、小説家、評論家俳句研究家)の令兄。号は輝堂。

(四) 高木輝堂 第一三卷・二号

鞍馬山與謝野寛先生歌碑前有作 (七言絶句)

鞍馬山の与謝野寛先生の歌碑の前にて作あり

松杉擁路鬱葱葱 松杉路を擁して 鬱葱葱たり

貞石巍然幽谷中 貞石巍然たり幽谷の中

遺詠自留門弟子 遺詠自ずから留む 門弟子

低徊切切憶高風 低徊切切 高風を憶う

国府犀東曰く 縣逸悽惻 三四は沈痛。生前相い識り、夙に其の歌に服す。今誦し一に誦す 風丰眼に在り。

(五) 柏邨(市丸利之助) 第一六卷・二号。(消息)

最近の柏邨氏の詠草の終りに、左の詩が書かれて居りました。氏は

『冬柏』…新詩社『明星』の未完の終焉

第一線の危険の地に指揮されて居られながら、毎月詠草を送って下さいます。

弔問敷島隊長 敷島隊長を弔問す (五言律詩)

神風第一線 神風 第一線

俟君動海南 君が海南を動かすを俟つ

挺身屠敵艦 身を挺して敵艦を屠り

魁傑關行男 魁傑 關行の男

國難誓欲掃 國難 掃わんと欲するを誓い

聖戰必可戡 聖戰 必ず戡つべし

噫青春廿四 噫 青春廿四

悠久大義參 悠久 大義參る

*柏邨(市丸利之助)海軍軍人。柏邨は号。佐賀県松浦郡久里村柏崎の出身。

(六) 田中松太郎 第一三卷・二号

八十叟歡喜

八十叟の歡喜

(五言古詩)

王春壬午旦 王春 壬午の旦

皇土哀老奉 皇土 哀老奉ず

香港仰新綱 香港 新綱を仰ぎ

南洋蔽聖旆 南洋 聖旆を蔽う

讐讎詔下沈 讐讎 詔下りて沈み

戰棧餅皆繪 戰棧 餅は皆繪

登隴八十翁 隴に登る八十翁

東天日輪大 東天 日輪大なり

御一笑下されたく候。恐恐敬服。一月十五日(田中松太郎)

『冬柏』…新詩社『明星』の未完の終焉

〔注〕

① 主なものを挙げておく。

○西村富美子「与謝野鉄幹と漢詩―『冬柏』時代の漢詩人 与謝野寛」。東海学園 言語・文学・文化 第十号。

○西村富美子「与謝野鉄幹・晶子主宰『明星』の最後の同人誌『冬柏』―異彩の同人 井上蒼溪について―」。

*与謝野鉄幹・晶子「新詩社」の変遷―『明星』と『冬柏』―。二〇一三年一月三〇日、於…堺市立女性センター。

*鉄幹・晶子主宰「明星」の精神を継いだ最後の同人誌『冬柏』の諸相。二〇一七年三月一〇日。於…堺市立女性センター。

*「与謝野寛・晶子主宰〈新詩社〉の同人誌『明星』の軌跡」―『明星』と『冬柏』…『冬柏』を中心として―。二〇一八年三月一〇日。於…堺市立女性センター。

*「与謝野晶子の晩年の創作活動―寛没後、『冬柏』を中心として―」。二〇一八年二月五日。於…堺市立女性センター。

*は講演レジュメ。

②

熊本県球磨郡多良木町、宮元家旧蔵、多良木町所蔵。全一八七冊。欠号は、第四卷・四号、第一七卷・一号、二号秋季号、第一八卷・秋季号（欠号四冊のうち、第一七卷・二号秋季号一冊は堺市博物館所蔵。第四卷・四号、第一七卷・一号、第一八卷・秋季号の三冊は森下明穂氏所蔵により補完）。なおこの宮元家旧蔵の『冬柏』の原本の発見調査に関しては近藤晋平氏の緻密な調査によるものである。（企画展パンフレットの【特別寄稿】に、「宮元尚旧蔵『冬柏』原本発掘の経緯と意義及び復刻版『冬柏』刊行の意義」と題する詳細な解説文を寄せておられる。）

③

復刻版『冬柏』全二六卷・別冊一。不二出版（代表 細田哲史）。企画展『明星』創刊二〇年・『冬柏』創刊九〇年記念。「冬柏―『明星』の精神を貫いた理想郷―」。於…大阪府堺市宿院町西二丁

―一さかい利晶の杜。

④ 執筆者は適宜選定したものである。

⑤ 「新詩社に同人たる諸君、全国通じて二百人を超ゆ。」（与謝野寛年譜）明治書院）

⑥ 『冬柏』第一卷・一号、一頁。（常用漢字、現代かなづかい）。田中悌六は年齢も若く、画才・文才の両才能の持ち主であった。

⑦ 近江満子は早くから晶子に後継者として直接指名されていた。第一九巻秋季号の「冬柏だより」に、「今月からはお約束通りとも角も表紙絵をつけた。羊頭狗肉の謗りを受けぬ間に椿は手製で間に合はせた。追々大家にお願ひする事にしよう。早く内容をもっと向上させ、いい着物をきせたいものである。（満子）」とある。

⑧ 創刊号に名を連ねる著名な歌人岩野喜久代も、昭和一〇年（一九三五）に新詩社の維持会員になっている。（第七卷・一号、消息、晶子）

⑨ 『冬柏』第一卷・一号、消息欄。

⑩ ⑪ 参照。

⑫ 『追記』『冬柏』の原文の引用は、文字の使用は適宜変更している場合がある。